

# 海ゆかば 異聞

高田 友

大伴家持（718～785）は大伴旅人（665～731）の嫡男なり。旅人も家持も名高き歌人、父子揃ひてかほどの文學的業績を残したるは、餘には四百年後に出づる俊成・定家ならではあらじとぞ見ゆる。

家持十六歳の砌に詠みたる初戀の歌は秀逸なり。

ふりさけて若月見れば一目見し

人の眉引き思ほゆるかも

大伴家は家持の生るるより二百年前、大伴金村全盛を誇り、朝廷首座の重臣たりき。椿事出來するなからましかば、蘇我・藤原に右を譲ることなく、權柄を恣にしてあらまし。應神五世の皇孫と傳ふる繼體天皇を近江（または越前）より迎へ、皇位に付け奉りたるは金村。然而、次代欽明天皇の御代五〇年に、任那の經營に與り、百濟より賄賂を収めたるの儀發覺して、金村は失脚、以後大伴氏は衰退の一途を辿る。

惟、大伴氏の命運盡きたるには非ず。旅人も大宰帥（左遷なりと傳へらる）を経て、七二八年、六十四歳といふに大納言へと陞めらる。逝世したるは六十七歳。

息・家持は、七四六年越中守、七八三年六十六歳にて中納言に任ぜられ、久しからざるに、六十八歳を一期として往生せり。齡先考に過ぐるも、動もすれば出頭及ばざりしは、大伴一族の次第に落魄せるに據りてなりけん。

己而、七四九年、陸奥國にて始めて金の産出あり、聖武天皇に獻上せらる。皇上これを嘉せられ、「陸奥國より黄金出せる詔書」を渙發したまふ。

この詔書に於て、大伴氏のいにしへの忠誠と武勇讚へらる。をりしも越中に赴任してありし家持齡三十二、感ずる所ありて、「陸奥國出金詔書を賀ぐ歌」を詠む。

「葦原の、瑞穂の國を、天下り、知らしめしける、すめろきの、神の命の、御代重ね、天の日嗣と、知らし來る」と始まる萬葉第二の長き長歌なりき。

長歌の後に、「短歌三首」の併せらるれば、ご紹介仕らん。

丈夫の心思ほゆ大君の

御言の幸を聞けば貴み

大伴の遠つ神祖の奥城は

しるく標立て人の知るべく

天皇の御代榮えむとあづまなる

陸奥山に黄金花咲く

この長歌の中に、「海行かば」は藏められたり。  
該當箇所を含む箇所を引用せん。

大伴の遠つ神祖のその名をば大久米主と負ひ持ちて仕へし官海行かば水漬く屍山行かば草生す屍大

君の邊にこそ死なめかへり見はせじと言立て 丈夫の清きその名をいにしへよ今の現に流さへる

名高き「海ゆかば」より「かへりみはせじ」までは、すなはち軍歌の歌詞なり。

この歌詞部分は、大伴家の重代傳ふる勇武の歌にして、聖武天皇これを詔敕の一部に引用したまふ。而して、家持のこれをまた孫引きしたるといふが真相なり。最後尾、「かへりみはせじ」とあれど、此處のみ、「長閑には死なじ」と歌ふ別儀の歌詞あり。何故なりやは諸説唱へらるるも、そもそも古への歌に雙方ありて、掛け合ふが如くに應答しつつ歌ひたるにあらずやと唱ふるが有力説なり。

さて、この「五六五七七七六」すなはち、軍歌とは化したりけり。昭和十二年、信時潔の作曲せる所なり。信時はキリスト教の牧師の子、後に東京音楽學校の教師にこそはなりたりけれ。幼時より讚美歌に慣れ親しみたるがゆゑならん、「海ゆかば」を聞けば、讚美歌獨特の旋律を感ぜずんばあらず。

戦後のキリスト教會にては、信時は軍國主義に協力したりしとて糾弾する人尠ならず。

ああ、愚なるかな。心なきかな。何條軍國主義ならん。何條復古主義ならん。やはか樂の音に謨事のあるべけん。假令戰意を昂揚せしめんがために用ゐられたらんとも、歌の美しきを讚ふるにいかでか躊躇のあるべき。

平成元年、「聯合艦隊」なる映畫、テレビにて放映せらる。映畫の終末は戦艦大和の撃沈をこそ描きたれ。三千世界の鰲舩及ぶなかりし巨艦七萬五千噸、延べ千に及ぶ敵艦載機の猛攻に堪へず、つひに船首を擡げて直立し、やがて横轉して坊津沖の海に没す。

大和沈みたる海面に流るる「海ゆかば」の調、誰か能く涙なくして聞くべかりし。此處に神洲萬姓の魂の古郷あり。君、輕々に軍國を論ふなかれ。

この歌、盍ぞキリスト教會にて讚美歌代りに歌はざる。いんぬる師走、さる自治體の教育委員會、民間團體の主催する歌のイベントの後援を企圖したるに、數多の演奏曲中に「海ゆかば」含まれたりとて異を立つる者共あり、教育委員會は恫喝に屈して後援を取りやめたりとぞ傳へらるる。

いかい狭量、嘆息するに餘あり。

(平成三十一年三月十八日受附)